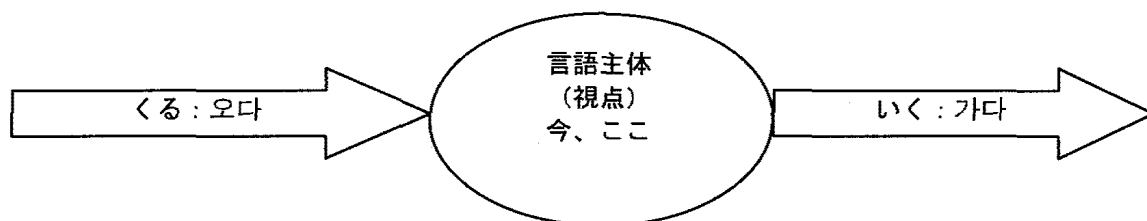


補助動詞「くる：오다」の焦点化による意味分類 — 日韓両言語の対照研究の観点から —

徐 民 靜

0. はじめに

本研究は、先行研究¹「補助動詞『いく：가다』の移動の拡張による文法化」と同様の手法で考察を行ったものである。先行研究の結果、補助動詞「いく」には、最も本動詞の意味に近い「空間移動」、そして「時間移動」、そして「心的空間移動」という拡張の段階が見られた。言語主体を中心に考えた場合、「行く」と「来る」には、言語主体から離れて行くか、言語主体の方へ近づいてくるかという、プロトタイプの意味があり、本動詞の意味としても補助動詞の意味としても含まれている。簡単な形で図式化すると、【図1】のようになる。それでは、「いく」と「くる」の間には、方向の違いである「くる：오다」にも、「いく」と同様の段階性が見られるのだろうか。



【図1：プロトタイプの意味】

どの言語にも「くる：오다」に該当する意味の動詞は存在すると思うが、日本語の場合、本来の意志を持った移動主体が言語主体（視点）の方に移動するという意味から、(1)のような場合でも「くる」を用いることができる。このことは、「くる」のプロトタイプの意味である、「言語主体への移動」という意味が内在しているからであるが、この点は、韓国語でも同様な現象が見られ、直訳が可能であり、同じ意味になる。

¹2006年7月に韓国韓南大学校で開催された韓国日本学連合会「第4回国際学術発表大会」で研究発表を行ったものである。

- (1) 日本語を10年間勉強してきた。
일본어를 10 년간 공부해 왔다.
- (2) だんだん涼しくなってきた。
*점점 시원해져 왔다.

言語類型から見て、非常に類似していると言われる両言語だが、本動詞から補助動詞への意味の拡張にまで同様の現象が見られるのは興味深い現象の一つである。しかしながら、日本語なら、自然な表現であるにも関わらず、韓国語では不自然な表現になる場合がある。(2) のような場合、韓国語で言うと、「*점점 시원해져 왔다.」になり、自然な表現とは言えない。このような違いは、どの場合に生じ、また、なぜそのような違いが発生するのかについて検討していくことを本稿の目的とする。

1. 先行研究と疑問点

1.1. 先行研究

<坂原 (1994) >

先行研究として「てくる」について書かれた論文に坂原 (1994) がある。この論文では、「てくる」を5つの用法で説明している。第1用法は、単なる等位構造のテ形接続で、従属動詞も「来る」も統語的自立性を保持している場合、第2の用法は、第1の用法の延長上で、従属動詞あるいは「来る」の統語的自立性が多少とも制限され、複合動詞化が進行している。従属動詞と「来る」が表す事態の生起順により、「継起系」と「同時系」の2つの下位クラスに分けられる。第3の用法は同時系からの発展で、「来る」は、文全体あるいは従属動詞が明示的あるいは非明示的に含む移動を強化し、それに方向を与える。第4の用法は、変化の出現を表す始動アスペクトの表示で、第5の用法は行為や事件の継続を表す継続アスペクトの表示である。

坂原によると、「継起的事件を表す「Vてくる」では、因果関係の解釈はできないため、従属動詞とVの関係は、ほとんど単なる時間関係に限定され、それ以上の意味の拡大が見られない。」とし、また「同時に進行する2つの事件は、因果関係が見られない場合でも、多様な関連を持つことができる。」と述べているが、本稿では、この「同時系」に見られる、日本語の特徴を韓国語との対照によって見出し、焦点化という観点から、

捉え直した。また、始動アスペクトと継続アスペクトという二種類のアスペクトの区別は、補助動詞「くる」の日韓両言語の対照研究に有効なものであったため、アスペクトに関しては坂原（1994）に従っている。

＜塚本（2006）²＞

次に、日韓対照の観点から書かれたものに、塚本（2006）がある。塚本（2006）では、表にまとめてあるように、「てくる」の用法を5つの意味に分類することによって、対照を行っている。塚本（2006）の分類は、後に述べる本稿の立場から見ると、(A) (B) が空間の移動で、(C) (D) (E) が時間の移動に当たる。時間の移動は、さらに継続アスペクトの(C)と始動アスペクトの(D) (E) とに分けることができる。しかし、塚本（2006）の分類では、日本語と韓国語を対照することによって浮き彫りになる、日本語の「言語主体との関わり」が言語化された場合の「くる」は説明できない。また、「出現」と「開始」は、「発生や状態の変化」という観点から考えれば、韓国語と比べると、「今、現在の状態の変化もしくは開始」として捉えることが可能になり、分類の必要はないと思われる。

1.2. 疑問点

- ① 塚本（2006）でいう「出現」と「開始」の分類は日韓両言語の対照の際、果たして有効なのか。

	日本語	韓国語
(A)移動	駅まで歩いてきました。	역까지 걸어왔습니다.
(B)継起	母が花を買ってきた。	어머니가 꽃을 사 왔다.
(C)継続	先生は二〇年間もこの問題について研究してきた。	선생님은 이십년 동안이나 이 문제에 대해 연구해 왔다.
(D)出現	前に進むと、海が見えてきた。	?앞으로 나아가자 바다가 보여 왔다. 앞으로 나아가자 바다가 보였다.
(E)開始	近頃、寒くなってきた。 急に雨が降ってきた。	*요새 추워져 왔다. 요새 추워졌다. *갑자기 비가 내려 왔다. 갑자기 비가 내리기 시작했다.

²まとめは筆者によるものである。

(D) 出現：앞으로 나아가자 바다가 보이기 시작했다.

(見え始めた)

(E) 開始：요새 추워지기 시작했다.

(寒くなり始めた)

- ② 出現や開始の意味になると、なぜ韓国語では言えないのか。→文法化の進度の違いなのだろうか。
- ③ 「くる」と「오다」の両言語間のどの段階から違いが見られ、その違いの生じる理由は説明できるのだろうか。

2. 焦点化による分類

本稿では、補助動詞「くる：오다」の分類カテゴリとして、移動時に伴う、起点、経路、着点のどの部分が焦点化されるのかに注目した。補助動詞「くる：오다」には、移動の経路が焦点化される場合と着点が焦点化される場合とが存在する。さらに、焦点化による分類には、空間の移動から時間の移動への移動の拡張関係が見られる。

2.1. 移動経路の焦点化

「くる：오다」には移動の経路と着点が焦点化される場合があるが、ここでの「くる：오다」は、言語主体の領域への移動という方向、つまり移動の経路が焦点化されている場合について説明する。移動の経路が焦点化されているため、言語主体に向かった矢印の方向によって「いく」「くる」の両方の結合が可能である。この点に関しては、日本語と韓国語は同様である。もっと詳しく検討するために、移動の経路が焦点化されている場合の、経路に現れる特徴を挙げて、説明する。

2.1.1. 移動時の方法

移動の経路が焦点化される場合、補助動詞「くる：오다」には移動時の方法を表す動詞が現れる。これらの動詞は、本来方向性を持たない動詞で、「くる：오다」が付くによって方向性が生まれる。

(3) 学校まで走ってきた。

학교까지 달려 왔다.

(4) ボールが転がってきた。

공이 굴러 왔다.

- (5) ベンチ入りは20人なのに24人を連れてきたのはそういう理由。

(サンケイ)

벤치에 남는 것은 20 명인데 24 명을 데려/데리고 온 것은
그런 이유.

「走る (달리다)、転がる (구르다)、連れる (데리다)」などの動詞に補助動詞「くる：오다」が付いた場合、前項動作と後項動作の「くる」は同時進行であると言える。しかし、(5)の韓国語を見ると「連れてきた」は「데려 온 または 데리고 온」の両方の言い方が可能である。韓国語には日本語のテ形に相当する、接続語尾がいくつかあるが、「～てきた」の「テ形」に相当する接続語尾には「～て：－어形と「～て：－고」形がある。しかし、「～て：－어」形と「～て：－고」形には使い方に違いがある。「～て：－어」形を取っている「데려 왔다。」の「－어」は、前項動詞と後項動詞を同時進行で結合させる働きがあり、「～て：－고」形の「데리고 왔다」の「고」は、前項動詞と後項動詞を時間の順序で結合させる働きがあると言える。しかし、(5)の日本語では「連れる」と「くる」は同時進行の意味しか持たないにもかかわらず、韓国語になると、二つの表現が可能である。このことは、韓国語の場合、「連れる」と「くる」の結合力が強く、分離が困難な「데려 왔다。」の場合と、「連れる」と「くる」の間には他の動作の介入が可能な「데리고 왔다」の場合との二つの解釈が可能なが考えられる。「데려 왔다。」で表現する場合は、「連れる」と「くる」を一連の動作として認識している場合で、「데리고 왔다」の場合は、「連れる」と「くる」を別々に認識していることが言語化されている場合だと言える。

2.1.2. 移動時の状態

移動の経路には、「持つ (가지다)、背負う (업다)、着る (입다)」などの動詞に補助動詞「くる：오다」が付いて、移動時の状態を表す。

- (6) 私も青いハンドタオル持ってきたんですよ (日刊スポーツ)

나도 파란 손수건을 가지고/가져 왔어요.

- (7) 赤ちゃんを背負ってきた。

아기를 입고/입어 왔다.

(8) 今日は着物を着てきた。

오늘은 기모노를 입고 왔다.

(9) 95년 전남의 창단멤버로 입단해 11년간 줄곧 전남 유니폼을 입어 왔다. (연합뉴스)

95年全南の創設メンバーとして入団し、11年間ずっと全南のユニフォームを着てきた。

(6) は「ハンドタオルを持った状態」で移動したという意味で、「持つ」動作自体は、持つ行為を行ったその場で一旦終了しているが、「ハンドタオルを持った状態」は維持されたまま、移動したという意味で解釈できる。(7) も同様である。(6) (7) の韓国語は、「～て：－고」形と「～て：－어」形の両方とも接続が可能であり、言語化が可能である。このことは、(5) でも説明したように、韓国語の場合、移動時の「状態」が焦点化されるか、「移動」が焦点化されるかによって、使い分けていると言える。すなわち、移動時の「状態」が焦点化されている場合なら、「～て：－어」形が、「移動」自体が焦点化されている場合なら、「～て：－고」形が言語化されるのである。

(8) の日本語は (6) (7) と同じ説明が可能であるが、(8) の韓国語は (6) (7) のように「～て：－고」形と「～て：－어」形のどちらも表すことができるわけではない。(6) (7) の韓国語は、「状態」か「移動」かのどちらがより際立つか、つまり焦点化されているかによって使い分けると説明したが、この使い分けは言語主体の認識状態によるものである。つまり、言語主体がどちらをより強く認識しているかによって、語形からすると「～て：－고」形でも「～て：－어」形でもどちらも言えるということである。しかし、(8) の日本語と同じ意味を持つ韓国語は「～て：－고」形でしか表すことができない。なぜ (8) は、(6) (7) のように説明できないのだろうか。「～て：－고」形と「～て：－어」形の違いについては前にも述べたが、韓国語の場合、「～て：－고」形を用いると、前後の動詞の順序を表す意味が強くなり、「～て：－어」形を用いると、前後動詞の結合力が強くなる。「～て：－어」形より、「～て：－고」形の方が一つの動作という認識は弱い。つまり、(8) の「입고 왔다」は、これまでの説明からすると、「着物を着る」ことと着

物を着て「移動する」ことは、時間の順序を表すだけで、「～て：－어」形の接続ほど結合力が強いとは言えない。このように考えていくと、韓国語は「着る動作」とその状態で「移動する」ことが別々の動作として認識され、(8)のような例の場合は、その状態で「移動する」ことが焦点化されているのである。

一方、(9)のように「～て：－어」形を用いると、「着る動作」とその状態で「移動する」ことの結合力強くなり、状態維持が焦点化されるため、アスペクト性が現れ、言語主体の空間領域への移動とは言えなくなる。アスペクトに関しては、次の項で詳しく述べることにする。

2.1.3. 継続アスペクト

補助動詞「くる：오다」の空間の移動から時間の移動への意味の拡張が見られるのが、継続アスペクトである。ここでいう、継続アスペクトは、坂原（1994）を引用したものである。坂原（1994）では、「来る」が継続アスペクトに解釈されるのは、従属動詞が同じ状態の継続か、同じタイプの事件の繰り返しによる質的変化のない継続を表す場合である。継続であるから、瞬間的時間副詞、所要時間の副詞とは共起しない。(172)のように継続の開始時点、継続期間の時間副詞とは共起する。」と述べているが、本稿では特に「質的変化のない継続」という面に注目した。次の例は、「質的変化のない継続」と言える場合の例である。

- (10) 太郎は、戦後から、30年間、東京で暮らしてきた。³

타로오는 30 년간 도쿄에서 살아 왔다.

- (11) 先生は二〇年間もこの問題について研究してきた。⁴

선생님은 이십년 동안이나 이 문제에 대해 연구해 왔다

- (12) 創業者に次ぐ第2位の株主としてずっと支援してきた。(日本経済新聞)

창업자에 이어 제 2 위 주주로서 계속 지원해 왔다.

- (13) 1999년 소주세율을 크게 올린 뒤에도 소주 소비량은 계속 늘어 왔다. (한겨레신문)

1999年、焼酎税率を大幅に上げた後にも焼酎の消費量はずっ

³坂原（1994）の例文（172）引用。

⁴塚本（2006：21）引用。

と増えてきた。

(10)～(13) の例の日本語の部分を見ると、「～てきた」が付いて「今、現在」を着点としてずっと続けてきたという意味であることが分かる。続ける事態には質的变化はなく、同じ事態が繰り返され、今、現在まで続くという意味で解釈できる。(9)～(13) の例の韓国語の部分を見ると、すべて「～て：－어」形だけが使われている。このことは、前に述べた「移動の方法」や「移動時の状態」とは違い、「～てきた」が継続の意味で使われる場合は韓国語でも「質的变化のない事態」と「時間の移動」を別々に認識することではなく、事態は時間とともに移動していると認識していると言える。そのため、継続アスペクトの場合、「～て：－고」形を用いることはない。補助動詞「くる：오다」の「空間の移動」から「時間の移動」へと認識でき、その拡張が言語化された形で現れるのは日本語と韓国語で共通している。

例文 (8) (9) をもう一度見てみると、(8) と (9) ではどうして各々「입고 왔다」と「입어 왔다」になるのかが分かる。

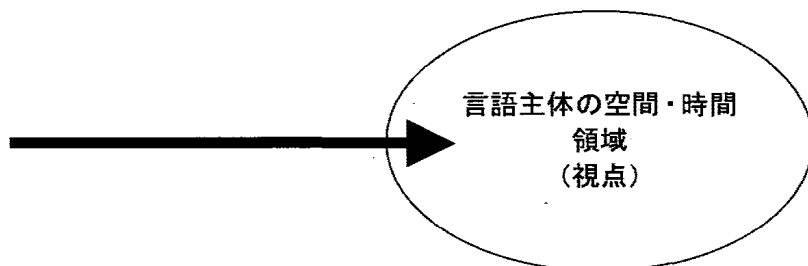
(8) 今日は着物を着てきた。

오늘은 기모노를 입고 왔다.

(9) 95년 전남의 창단멤버로 입단해 11년간 줄곧 전남유니폼을 입어 왔다. (연합뉴스)

95年全南の創設メンバーとして入団し、11年間ずっと全南のユニフォームを着てきた。

(9) の「着る」動作に対する認識は、(8) の「着る」動作の認識とは異なる。(8) の場合、「着る」動作事態が焦点化されているので、「着る」ことと「来る」こととを別々に認識できた。しかし、(9) の場合、「着る」



【図 2：移動経路の焦点化】

動作事態が焦点化されているわけではなく、「着ている状態が続いている」ことが焦点化されているのである。

2.2. 着点の焦点化

ここでは、補助動詞「くる：오다」の着点が焦点化された形で現れる場合について説明する。補助動詞「くる：오다」の着点が焦点化されている場合、着点はつまり「言語主体（視点）」ということになるため、特に言語主体との関係に注目し、両言語間ではどのように言語化されるのか、考察していく。

2.2.1. 移動の着点の強化

移動には、起点、経路、着点に伴うが、ここでいう補助動詞「くる：오다」が移動の経路を含む、起点と経路、または経路と着点が焦点化された移動動詞である。移動の経路が焦点化された動詞に「くる：오다」が付いて言語主体の視点を確定することができる。

次の(14) (15) の例は、言語主体の領域が着点となり、また言語主体領域に視点が確定されている場合の例である。

- (14) チョルスが部屋に入ってきた。

철수가 방에 들어 왔다.

- (15) 犬が近寄ってきた。

개가 다가 왔다.

- (16) 部屋を出る。

*방을 나다.

방을 나가다/나오다.

- (17) 列車が駅に近づく。(『大辞林』)

열차가 역에 다가 간다/다가 온다.

「入る (들다)、近づく (다가가다/오다)⁵」などの移動動詞は、日本語の場合、視点の確定がない形でも使えるが、韓国語の場合、この類の動詞は常に視点が確定された（方向が決まった）形でしか使えない。(16)

⁵この他にも「出る (나다)、帰る (돌아가다/오다)、戻る (되돌아가다/오다)」などがある。

(17) の例は言語主体の視点が確定されていない形の例文であるが、韓国語の場合、日本語のような表現はできない。つまり、韓国語のこの類の動詞は、常に言語主体の視点を確定した形でしか現れないのである。日本語の場合、「出る、入る」のように言語主体の視点が確定されていない、ニュートラルな表現が可能であるのに対して、韓国語の場合は日本語のようなニュートラルな表現はできず、「いく」か「くる」かのどちらかに、必ず視点をおかなければならない⁶。そのため、(16) (17) のように「出る」や「近づく」の形のままでは韓国語の表現はできない。しかしながら、これらの移動動詞に方向性がないわけではない。移動の起点や着点の方へという方向は決まっている。ということは、日本語の場合、「くる」が付くことによって、言語主体の領域へという方向がより強く現れると言える。これに対して韓国語は、これらの移動動詞自体に言語主体の視点が定まった形で現れるのである。

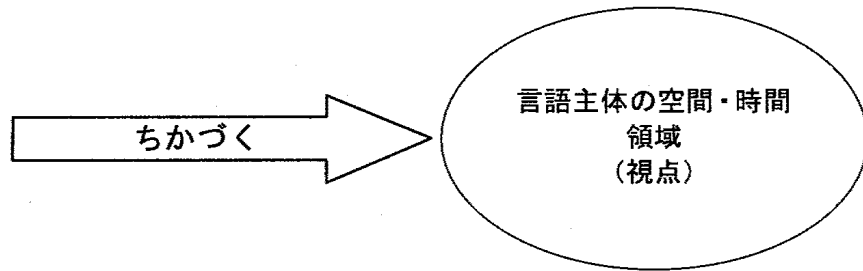
それでは、日本語のこのようなニュートラルな表現を韓国語で記述する際、辞書ではどのように記述されているのであろうか。日本と韓国で出版されている手元の日韓・韓日辞書の記述を比較してみることにする。

	辞書 \ 見出し語	다가오다	다가가다	ちかづく
日本で出版された辞書	『朝鮮語大辞典』	近づく、近寄る		
	『朝鮮語辞典』	近づく、近づいてくる、迫ってくる、迫る	近寄る、近づく	
	『標準韓国語辞典』	近寄ってくる、近寄る、やってくる	近寄る、近づく	
	『例解新日韓辞典』			가까워지다. 다가가[서]다.
韓国で出版された辞書	『民衆엣센스韓日辞典』	近づく		
	『民衆엣센스日韓辞典』			가까이 가다. 다가오다.
	『동아프라임일어사전』			접근하다. 가까이 가다. 다가가다.

【表1：日韓・韓日辞書の記述の比較⁷】

⁶ 詳しくは徐民靜 (2003) 参照。

⁷ 【表1】はそれぞれの語の比較をしやすくするために、辞書の見出しの一番目の意味だけを抜粋し、まとめたものであることを断っておく。



【図3：「ちかづく」の視点】

これらの辞書の記述を比較してみると、日韓辞書の日本語の見出し「ちかづく」の説明には、韓国語で「다가가다. (近づいていく)」が多く、韓日辞書の韓国語の見出し「다가오다」には「ちかづく、近づいてくる」と説明されており、「다가가다」には「近づく」と説明されている場合が多いようである。また、『朝鮮語大辞典』には「다가가다」の見出しがなく、『民衆韓日辞典』にもなかった。これは手元の辞書を調べただけなので、信憑性が高いとは言えないが、韓国語から見た「ちかづく」は、言語主体が対象の方に「近づいていく」意味に近く、日本語から見た場合でも言語主体が対象の方に「近づいていく」意味に近いのではないかとと思われる。

次の(18)(19)の例は、日本語から見ると、(14)～(17)の例とそれほど変わりがないように見えるが、韓国語から見ると、(14)～(17)の例のように説明できない。

- (18) 生まれてくるお子様が男の子であれば、(テレビ東京)

*태어나 올 아이가 남자 아이라면
태어날 아이가 남자 아이라면

- (19) 石が落ちてきた。

*돌이 떨어져 왔다.
돌이 떨어졌다.

(18)(19)の例は、移動の経路を表す移動動詞であると言えるが、これらの日本語の意味にも、やはり言語主体の領域へという方向の着点が焦点化されている。しかし、韓国語の場合は、「生まれる」や「落ちる」

などに補助動詞「오다」を付けることはできない。これらの動詞は、本動詞のみで表現する方が自然である。なぜ、韓国語の場合はこのような表現が許されないのか、日本語の文を読み直してみる。仮に、(18) (19) の日本語の文の「くる」を取った形で読んでみると、多少意味のニュアンスは変わるが、言語事実としては同じであることが分かる。すなわち、これらの日本語表現は言語主体の領域への移動の強化、言い換えれば、言語主体と関わりを持つことが言語化された表現であると言える。つまり、「生まれる」や「落ちる」という事態が言語主体の領域へ「入ってくる」という言語主体の意識の反映であると言える。これに対し韓国語の場合は、「生まれる」や「落ちる」のように、移動の着点が明確に定まっていないとはいえ、移動の着点が言語主体の領域である場合、日本語のようにまた「오다:くる」を付けることはできない。なぜならば、言語主体の領域へ「入ってくる」という言語主体との関わりを強調する表現は、韓国語では言語化しない傾向があるためである。というよりむしろ、日本語の場合、言語主体の領域への関わりを言語化する傾向があると言える。つまりこのことは、「くる」には移動の着点を強化する働きがあると言える。

2.2.2. 始動アスペクト

「始動アスペクト」は、坂原 (1994) の用語であるが、本稿では前に述べた継続アスペクトが「質的変化のない継続」であるのに対して、移動の対象や状態が変化し、その変化したものが言語主体の方へ移動するという意味で引用している。次の (20)～(26) の例は、事態が変化しながら、言語主体の領域の方へ近づいてくる場合の例である。

(20) 散歩をする人が増えてきた。

*산책을 하는 사람이 늘어 왔다.
 산책을 하는 사람이 늘었다.
 산책을 하는 사람이 늘기 시작했다.

(21) 9月に入ってから朝夕とも涼しくなってきた。(佐賀新聞)

*9월에 들어서부터 아침 저녁으로 시원해져 왔다.
 9월에 들어서부터 아침 저녁으로 시원해졌다.
 9월에 들어서부터 아침 저녁으로 시원해지기 시작했다.

(22) 目が疲れてきた。

*눈이 피곤해져 왔다.

눈이 피곤해졌다.

눈이 피곤해지기 시작했다.

(23) ほうたいが緩んできたんだ。巻き直してくれない? (『複合動詞』)

*붕대가 느슨해 왔어. 다시 감아주지 않을래?

붕대가 느슨해 졌어. 다시 감아주지 않을래?

(24) 肉が腐ってきた⁸。

*고기가 썩어 왔다.

고기가 썩었다.

고기가 썩기 시작했다.

(25) お湯が沸いてきた。

*물이 끓어 왔다.

물이 끓었다.

물이 끓기 시작했다.

(26) 山を歩いていると、硫黄の臭いがしてきた。

*산을 걷고 있자, 유황냄새가 나 왔다.

산을 걷고 있자, 유황냄새가 났다.

(20)～(26)の例文をみると、対象や状態に変化が見られ、言語主体の領域である、今、現在に向かって変化し始めたといった意味で日本語の場合「くる」が使われている。これに対して韓国語は、「오다」を用いることはできず、結果状態を表す表現をするか、開始の意味を持つ、「-기 시작했다：～し始めた」が対応している。この点については、塚本(2006)⁹でも同じ指摘がある。つまり、韓国語には「始動アスペクト」に該当する「오다」は存在せず、また「오다」には「始動アスペクト」を表す働きもないということである。

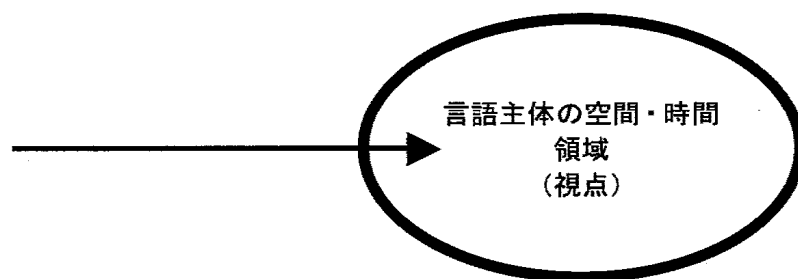
⁸今仁(1990)例の引用

⁹塚本(2006:22):「～後続する動詞「오다<ota>(来る)」を用いずに先行する動詞「보이다<poita>(見える)」や「추워지다<chuwuwecita>(寒くなる)」だけで表現するか、あるいは(19)cのように「내리기 시작하다<nayliki sicakahta>(直訳:降ること(を)始める)」というまた別の表現をとるしかない。」

両言語間のこのような違いは、日本語から見ると、始動アスペクトの「対象や状態の変化が言語主体の領域へ移動する」、という意味での移動の経路よりも、「言語主体の領域へ入っていく」という「着点としての言語主体の領域」がより強く認識され、焦点化されていると言える。つまり、着点の焦点化というのは、言語主体の領域との関わりを際立たせ、言語化するということである。これに対して韓国語は、言語主体の領域との関わりを言語化しない。(18) (19) でも同じことが説明できた。

(20) の「増えてきた：늘어 왔다」は単なる時間の移動だけを表しているのではなく、言語主体の領域の方へ段々と近づいてくるといった言語主体の領域との関わりが含まれた表現である。そのため、(20) の韓国語は「늘어 왔다」とは表現できず、「늘었다：増えた」か「늘기 시작했다：増えはじめた」で表現する。しかし、(13) の「増えてきた：늘어 왔다」の場合は、言語主体の領域との関わりとは関係なく、単なる時間の移動を表しているため、韓国語でも日本語と同じ表現ができたのである。

移動の着点が焦点化される場合、これまでの考察から、両言語間には言語主体の領域との関わりの有無で言語化の違いが現れることが分かった。



【図4：着点の焦点化】

3. まとめと結論

本稿は、補助動詞「くる：오다」の意味について焦点化という、どの部分を際立たせるかによって意味を分類したものであった。焦点化に注目したのは、本来移動動詞である「くる：오다」には、常に、起点、経路、着点が伴うが、言語化される部分（焦点化される部分）は言語事態によって異なると考えたからである。さらに、言語によって、その現れ方には違いがあるのか、というのも本稿での疑問であった。

焦点化の観点に立った分類は、二つに分けて考えることができた。一

つは、移動の経路の焦点化であった。移動の経路が焦点化される場合は、補助動詞「くる：오다」の意味は日韓両言語間で大きな違いは見られなかった。なぜなら、補助動詞「くる：오다」の用法として同じように使うことができたからである。もう一つは、移動の着点の焦点化であった。移動の着点が焦点化される場合の大きなポイントは、言語主体の領域との関わりであった。というのは、日本語の場合、言語主体の領域との関わりを言語化するのに対して、韓国語の場合は、言語化しないという違いが見られたからである。

このような焦点化による分類は、日本語と韓国語、両言語の対照研究に有効であると言える。なぜならば、焦点化による分類を通じて、両言語の共通点や相違点が明らかになったからである。特に、日本語の言語主体との関わり、つまり話者（視点）中心言語であることが、補助動詞「くる：오다」の対照研究を通じて明らかになった。

これらの考察結果をもって本稿の最初に述べた疑問に答えると、疑問点①「出現」と「開始」の分類は果たして有効なのか、という疑問については、用例一つ一つに対して、細かく意味分類していくことには有効であると思われるが、本稿での考察の立場からすると、「出現」や「開始」は始動アスペクトに該当し、移動の対象や状態が変化し、言語主体の領域との関わり、といった点からすると、それほど有効ではないと思われる。②なぜ、「오다」には始動アスペクトの意味はないのか、という疑問については、本稿での考察結果からは、文法化の進度の違いというより、言語主体領域との関わりを言語化するかしないかが、一つの原因ではないかと考えられる。日本語の場合、言語主体を中心に、その領域に何らかの関わりがあったことを言語化するが、韓国語の場合は、言語主体との関わりについては言語化しない。つまり、文法化の進度の違いではなく、言語主体との関わりの言語化の違いである。③「くる」と「오다」の両言語間のどの段階から違いが見られ、その違いの生じる理由は説明できるのだろうか。という疑問については、②の答えとも関わるが、今回の考察からは段階性が見られたというより、言語主体領域との関わりの言語化が一種の段階づけの基準となっていると言えるので、違いが現れる段階と言え、言語主体領域との関わりの言語化で、両言語間の違いが見られたと言える。

4. おわりに（今後の課題）

今回の考察を通じて、補助動詞「くる：오다」の日韓両言語間の共通点、相違点が明らかになったが、本稿においてはできなかったが、まだ詳しい考察が必要な部分が残されている。

一つは、「テ形」に対応する韓国語の接続語尾の形態についてである。韓国語には本稿の考察対象であった接続語尾「～て：어」形、「～て：－고」形以外にも日本語のテ形に当たる接続語尾があるが、今回の考察で、「テ形」と韓国語の接続語尾には複雑に絡まっているところがあることが分かった。しかし今回は狭い意味での対照比較に留まっているので、今後さらに考察範囲を広げていく必要があり、今後の課題とする。

もう一つは、本動詞としての「来る」の意味拡張の対照である。例えば、「雨が降ってきた」の場合、韓国語では「雨が来た」という表現ができる。このことは、本動詞としての「くる：오다」にも意味の拡張による、両言語間での共通点や相違点が見られるということである。本動詞に関する問題は、今回の考察の趣旨から少し離れた問題なので、考察内容には加えなかったが、本動詞の多義性の対照も補助動詞の意味拡張と関わっている部分があると思われるので、本動詞「来る」の多義性についての考察は今後の課題とする。

<参考文献>

- 今仁生美（1990）「VテクルとVテイクについて」『日本語学』9-5、明治書院
- 坂原 茂（1994）「複合動詞『Vて来る』」『Language, information, text』2、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻〔編〕
- 新美和昭・山浦洋一・宇津野登久子（1994）『外国人のための日本語例文・問題シリーズ4 複合動詞』、荒竹出版
- 塚本秀樹（2006）「日本語から見た韓国語－対照言語学からのアプローチと文法化－」『日本語学』25-3、明治書院
- 徐 民靜（2003）「移動動詞『出る』の日韓対照研究」『国文学論叢』第四十八輯、龍谷大学国文学会

<辞書>

大阪外国語大学朝鮮語研究室編（1986）『朝鮮語大辞典』、角川書店

編集委員：油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎（1992）『朝鮮語辞典』、
小学館

朱信源編著（2005）『標準韓国語辞典』、白帝社

林 四郎・野元菊雄・南不二男・国松昭編著（1993）『例解新日韓辞典<
改訂版>』、三省堂

安田吉実・孫洛範共著（1983）『民衆엠텐스韓日辞典』、民衆書林

安田吉実・孫洛範共著（1988）『民衆엠텐스日韓辞典』第二改訂版、民衆
書林

『동아프라임일어사전(東亜プライム日語辞典)』: <http://jpdic.naver.com/>

<例文引用元>

テレビ東京: <http://www.tv-tokyo.co.jp/biz/nms/days/060906/t4.htm>

日刊スポーツ: [http://www.nikkansports.com/sports/golf/p-sp-tp1-
20060827-81374.html](http://www.nikkansports.com/sports/golf/p-sp-tp1-20060827-81374.html)

サンケイスポーツ: [http://www.sanspo.com/soccer/top/st200609/st2006
090503.html](http://www.sanspo.com/soccer/top/st200609/st2006090503.html)

三省堂『大辞林』第二版: <http://dictionary.goo.ne.jp/>

佐賀新聞: [http://www.saga-s.co.jp/view.php?pageId=1036&blockId=
175422&newsMode=article](http://www.saga-s.co.jp/view.php?pageId=1036&blockId=175422&newsMode=article)

한겨레신문: <http://www.hani.co.kr/arti/opinion/editorial/65550.html>

연합뉴스: [http://kr.news.yahoo.com/service/news/shellview.htm?linkid
=17&articleid=2005102818183784801&newssetid=481](http://kr.news.yahoo.com/service/news/shellview.htm?linkid=17&articleid=2005102818183784801&newssetid=481)

日本経済新聞: [http://it.nikkei.co.jp/internet/news/index.aspx?n=MMIT
be000029082006](http://it.nikkei.co.jp/internet/news/index.aspx?n=MMITbe000029082006)

※本稿は2006年9月に関西外国語大学で行われた第19回表現学会近畿地区
例会で発表したものを修正・加筆したものである。

(本学大学院博士後期課程)